

新井白石『西洋紀聞』

——自然神学の可能性について——

道家弘一郎

Arai Hakuseki's *Seiyo Kibun* (i.e. What I heard about the Western World) : the Possibility of Natural Theology

Arai Hakuseki (1657-1725) is properly called an 'encyclopedist' in modern Japan. *Seiyo Kibun* is the first book in Japan ever to contain the word *Seiyo* (the Western World) in the title of a book.

Therefore it must not be overlooked as it is a most important book for those who have adopted the Western World as the object of study.

This book is divided into three parts, the first of which consists of the personal circumstances of Giovanni Battista Sidotti, an Italian Catholic missionary who came into shut-up Japan in the Edo Era and was examined by the author of this book, then a high officer in the Tokugawa government. Arai was also much impressed with the character of Sidotti, who had consideration for other people.

The second part is filled with objective information brought to Arai by Sidotti, such as the geography and social conditions of seventeenth-century Europe and other parts of the world. It is very touching that Arai absorbs with his whole mind what has been known in the Western World, and establishes the rule of writing foreign proper nouns in 'Kata-kana'. This rule gives us a great advantage which the Chinese people have not obtained.

The third part deals with Christian doctrine as explained by Sidotti. Arai criticizes the argument of the First Cause, saying that if everything is not made by itself but by a maker, as Sidotti has told him, Deus (the Christian deity) must have been made by something else, before heaven and earth were made, and that if Deus was born by himself, the world could have been born by itself.

This outlook of Arai's is the same as that which Bertrand Russell expresses in his famous book, entitled 'Why I am not a Christian'. Both of them deny the argument of the First Cause as a proof of God's existence. Natural theology is also denied by Karl Barth, who endeavours to establish a purely evangelical theology. According to Barth, natural theology must be rejected for it depends on what is false. God as the Creator is not known with the natural light of human reason. The Apostles' Creed should be believed from the first to the last.

This book of Arai's seems to be a photographic negative, which can immediately be turned to a positive that shows clearly and minutely what the true Gospel is.

『西洋紀聞』とは、西洋に関する聞書きということである。「紀」は「記」と同じく、「しるす」を意味する。欧米をさして西洋と呼ぶことは白石以前にもあった。『大友興廢記』（一六三七？）には「きりしたん宗は西洋宗とも又は耶蘇宗ともいへり」（傍点筆者）とあるが、西洋を書物の表題に用いたのは白石が最初とされる。中国で西洋といえ、西の大海の意で、中国西南岸および南洋諸島を指していたという。¹ そういうわけで、ヨーロッパを研究対象とするわれわれが、本書を見すこしてよいわけではない。本書こそわが国最初の西洋学の著作である。しかも著者は、日本の百科全書派ともいふべき当代最高の知識人であった。

本書はまた著者自らの自筆清書本が存し、現行の刊本はそれに依るから読者は安心して著者の思想を尋ねることができる。それは上中下の三巻から成り、上巻では、シドッチの潜入と白石の四回にわたった尋問の様子、獄卒長助・はる夫妻の受洗の發覺とシドッチの投獄、シドッチの獄死などの記述に、長崎奉行所からの報告を附録としている。つまり、この聞書きの対象となったシドッチ個人に関する記述が中心である。中巻では、五大州についての説明、エウロパ・アフリカ・アジア・北アメリカ・南アメリカ諸国の政治・地理・風俗に関する説明があつて、附としてスペイン継承戦争を中心とするヨーロッパの動乱の聞書きがある。いわば、その地理を主とした西洋の客観的な社会の記述である。下巻では、まずシドッチ渡來の詳しい説明があつて、その後、デウス、イエス・キリスト、ローマ教会、法王庁の職制、世界の諸宗教などについて解説し、最後に天主教に対する白石の批判が述べられている。もっぱら西洋の宗教を取り扱う。このように三巻の内容は、巻を追うにしたがつて、広がり、かつ深まる。それは何よりも白石の形而上学的志向を証明するものである。しかし本書の魅力は、そういう骨組みの確かさだけではなく、それを幹としてそこに繁り咲いているディテールの豊富さと、そのディテールを具体的な膨らみをもって描き出している文章にある。

I

イタリヤ人宣教師 Giovanni Batista Sidotti (一六六八一—一七一四) が、一七〇八年八月屋久島に上陸したのである。その身の丈は六尺をはるかにこえ、普通の人はその肩にも及ばなかった。歳は四十一、髪は黒く、眼はふかく、鼻は高かった。二尺四寸余の太刀を帯び、頭はさかやきにし、身には、四目結よめむすの紋に、茶色の裏をつけた、葦盤あしばんじまの浅黄色の木綿を着ていた。それから、一年と三ヶ月ちかくを経て、江戸の切支丹屋敷に引き出されたときには、白い木綿のひとえの肌着の上に、薩摩藩主より下賜された茶褐色ちがしきの紬とうの綿入れを重ねていた。髪はのびるにまかせて、あたかも幼童のかぶろのようであった。

われわれは映画やテレビで見るように、長い毛脛を出し、帯を胸のあたりに結んで、刀をだらりと差した、およそ様にならない紅毛人の着物姿を想像する。上陸当初は「ロウマ、ナンバン、ロクソン、カステイラ、キリシタン」などといい、ロウマというときに自分の身をゆびさすだけであった。だが一年余を経た今は、畿内、山陰、九州、四国などの方言がまじるために一層聞きとりにくいけれど、しきりに日本語を操り出すほどになっていた。

家康がキリスト教禁止令を出した一六一三年以来すでに百年近くが経っている。もうラテン系のことばを解するものはいない。やむをえずオランダ通事三人を介して白石はシドッチと対面した。切支丹屋敷のお白州において、一七〇九年一月二日の正午のことである。

長崎からの長途、シドッチは奥にのせて運ばれてきたから足が立たず、左右から二人のひとに支えられて、庭の椅子に掛けさせられた。旧暦のことだから、すでに冬の季節である。この第一回の対面において、既にはっとするよう

な出来事がおこる。

時の宗門奉行は、大目付の横田備中守由松と御作事奉行の柳沢八郎右衛門信尹である。横田は四千五百石、柳沢は八百石の旗本、白石は旗本とはいえ、その年七月、五百石に加増されたばかりである。この尋問の場の背景として三人の身分の違いは念頭においておく必要がある。

二人の奉行は、その着衣の薄いのを心配して衣を与えようとしたが、シドッチは、カトリックには信者の寄進以外はうけてならない掟がある、食べ物だけは命のためにやむをえないが、どうして着る物まで頂戴して掟にそむくことができるのか、初めに薩摩の殿様からもらったものを着ていれば十分に寒さを防ぐことができる、どうか心配はご無用に願う、と述べて辞退したのである。

それから二時間あまり白石は彼にその故国のことなどを尋ねたが、日もすでに西に傾いたので奉行の人々に別れを告げた。そのときシドッチは通事にむかって言った。

「わたしがここに來たのは伝道のためです。この国の人々に利益をもたらし、この世を救うためです。それなのに多くの人々に迷惑をかけ、年も押し詰ったこの寒さのなか、昼となく夜となく、御侍をはじめとしてここにいる人たちに守られているのを見るのは耐えられません。わたしが逃げ去るのを恐れてのことでしょうが、『万里の風波』をしのいで來たのは、なんとかこの國に來て使命を全うするためでした。いま念願かなって日本の首府にいます。ここを離れて、どこへ逃げるようなことをするでしょうか。たとえ逃げても、この國の人には似ていないのだから、一日たりとも身を寄せることのできることはありません。しかし命令にしたがって監視している人たちが務めを怠ることではできないでしょうから、昼はともかく、せめて夜は手枷・足枷などを用いて獄につなぎ、安心して休まれるよう、取り次いで下さい。」

二人の奉行もこの話をきくと、顔にありありと憐愍の色をうかべた。そのとき白石は高飛車に、

「この男は、おもいもよらず、うそをつく男だ」

といった。唐突なこの非難を、シドッチはひどく恨む気色で、

「だれにとつても、うそつきと言われるほどの恥辱はない。まして、うそをつくことは十戒にも禁じられ、物心ついてこのかた、ついに一言のうそをついたこともない。なぜそのようなことを言われるのか」

と反問した。白石は内心、自己の論理の土俵に、相手を引き入れたことに北叟笑みながら、

「今そういうことを言うのは、ここににいる人たちがこの寒さのなか夜昼となく、おまえを守っているのが、見るに耐えがたくて言うのか」

と問う。シドッチが他意のないことを語うと、白石はたたみかけて、

「だからこそ、おまえの言うことはいつわりなのだ。彼らがおまえを守るのも御奉行の命令を重んじるからであり、御奉行もまた上からの命令をうけておまえを守り、身に万一のことがあつてはならぬと思われればこそ、寒いときに薄い着物を案じて、何度も着物を与えようと言われるのだ。もしおまえの言うことが本当ならば、どうして御奉行の心配しておられることを安心させて差し上げないのか。もし御奉行がどんなに心配されようと、おまえが教会の法のために受けいられぬというのならば、どうして、今ここににいる者たちが、同じく法のためにおまえを守っていることに対し、とやかく差出がましい口をきくことができよう。だから、おまえがさきに言ったことが本当なら、いま言ったことは偽りであり、いま言ったことが本当なら前に言ったことは偽りである。このことは、どのように申し開くのか」

と問うた。シドッチは大いに恥じいった様子で自己の論理の矛盾をみとめ、着物をもらうことにした。奉行の人々も、

「ようい、言つて下さつた」

と言つて悦びあつた。シドッチはさらに付け加えて、贅沢な絹紬きんそうの類ではなく、質素な木綿の類にしてくれるように、通事に頼んだ。

こゝは全巻のなかでも最も注意をひく一節である。白石はここにどういふ思いをこめたのだろうか。相手の言い分を逆手にとつて、自己の主張をとおすのは、外交交渉の常套手段である。それを巧みに利用した自己の知力にくらかの自負がみえる。相手は庭のお白州に引きすえられ、警固の侍たちに見張られている。六年前（二七〇三）に日本伝道の命令をうけ、日本語習得のためだけでもすでに三年の月日をかけた。いま漸くにして宿願をはたし、單身渡來した宣教師が、ここでは罪人扱いされている。奉行たちは、シドッチの申し出の心根のやさしさに心を動かされている。それを *simile* に描くからには白石も同じ気持ちとを共有しているのであるが、それにしてはすいぶん嵩にかかった物言ひである。「よくこそそのたまひ給りつれ」といふ奉行たちのことばは、シドッチに向けられているようにもとれるが、白石に対する賛辞ととれなくもない。この一節でいちばん光っているのは、シドッチの態度の素直さである、とわたしには思われる。

第二回目は、三日後の十一月二十五日、午前十時から午後一時まで、奉行所所蔵の、一六四四年頃製作されたジョン・ブラウ（?—一六八〇）の世界地図をもち出して対談している。シドッチは、この地図は七十年前前に作られたもので、今ではヨーロッパでも簡単には手に入らない、ここかしこ破れているのは惜しいことだから、修理して後に伝えられるように、と語っている。尋問のあと白石は案内されて獄舎を見てまわり、シドッチの身のまわりの世話をする長助・はるの老夫婦に会う。シドッチは、三つに仕切つた獄舎の一番西の部屋に住み、赤い紙を切つて十字を作り西側の壁に貼つて、「その下にて法師の誦經すきやうするやうに、その教の經文を暗誦して居」た。

第三回は十一月三十日。その日は奉行の立会いもなく、一日中、前回につづき、もっぱらヨーロッパ諸国のことを尋ねた。その日の尋問が本書中巻の内容をなしている。シドッチの日本渡来の原因も、その教えの趣旨をも問う余裕はなく、事に触れて、彼がそれらのことを言いだしても、白石は返事さえもしなかった。

第四回は十二月四日。この日こそ、いよいよ「かれが来りし由をもたづねきはめばや」と思う。そうとなれば、彼もきつとその「申す所、必ず其教の旨にわた」るに相違ないから、奉行たちにも立会いを要請した。シドッチは「悦びに堪ず」、日本渡航の命令をうけてから六年、「万里の風浪をしのぎ来りて、つるに国都〔江戸〕に至」り、しかも折も折、本国なら新年の初の日として人皆相賀する日に、「初て我法の事をも聞召れん事」はこの上もない幸いであるといい、「その教の事ども説き尽しぬ」とある。それが本書下巻に記されている。しかしその内容は、日本名を岡本三右衛門と称した転びバテレン、キアラの書いた三冊の書と変らなかった。

この四回の尋問をとおして白石が感じたことは、シドッチが「博聞強記」にして「多学の人」であり、天文・地理のことにいたっては比肩する者なしということであった。

天文に関しては、最初の日に関心なことがあった。日はすでに西に傾くほどになったので、白石が奉行に時刻を問うと、奉行も「此ほとりには、時うつ鐘もなく」と答えた。するとシドッチは、日のある所を見、地上に写った自分の影を指で測って、びたりと時刻を言い当てた。

また地理に関しては、字が細かくて読みにくいブラウの世界地図の上に、白石の持ち合わせたコンパスを借りて、ローマも江戸も、いささかの指し損じもなく、指し示した。

慎みぶかく礼儀正しいことにおいても目立っていた。椅子に座るときには、左右の手を胸の前で組合わせ、一拝し

てから席につき、右の親指で十字を切ると瞑目して、何時間でも彫像のように動かなかった。奉行や白石が座をたつとき、また彼らが戻ってきて再び座につくときには、彼は「必ず起ちて拜して坐す」ことを繰返した。此儀日々にはらず、とある。

しかし、このように鹿爪らしいだけではなかった。ある時ひとりの奉行がくさめをしたときには、その人にむかつて、ちんぷんかんぷんなローマのまじないのことは誦したこともあった。

オランダ通事たちのラテン語の訛りは繰返し直させ、旨くいくと大いに賞めたものだが、白石のラテン語を聞いたときには、「通事の人々はなまじオランダ語が出来るために、その習慣が抜けなくて、とても今、仰言つたようにはいかない。これはかえって西洋の言語をご存じないからだ」といつて笑つたりもした。

またオランダの戦艦は舷側に上、中、下三層の窓を設け、その窓ごとに大砲をそなえているということを説明しようとして、適当なことはも見つからず、身ぶり手ぶりも難渋していたとき、白石が、左手を横にし、その四指の間から、右手の指頭を三つ突き出してみせたら、まったくそのとおり、なんて頭のよい人だ、と驚いた。

白石がオーストラリアの位置をきくと、シドッチは、これほどの才人が西洋にいたら、きっと大事をなすに相違ない、オーストラリアくらいはそんなに遠い国ではないから、取ろうと思えば簡単に取つてしまふだろう、侵略を誘導して殺人を犯すことは大戒にそむくことになる、といつて教えてくれなかった。その過賞には気がひけて、たとえその志があつても「我国に厳法ありて、私に一兵を動かす事はかなひがたし」といつて、白石は笑つた。

面白いのは、上巻の末尾にあるメニューである。普通の日には、お昼と日没の後と二度食べる。献立は、飯、小麦の団子・魚・大根・葱を薄い醬油と油少々で煮たもの、酢と焼塩をすこし副え、果物として焼栗四つ・蜜柑二つ・干柿五つ・丸柿二つ、そしてパン一つ。斎戒の日にはお昼に一度だけ食べる。ただし果物はその日も二度食べ、その数

を二倍にふやす。すなわち、焼栗八つ・密柑四つ・干柿十・丸柿四つ、それにパン二つは、二度食べる。果物の皮や種はどうするのか、すこしも見当らない。なお、斎戒の日にも魚をたべる。これらの食事の外は、湯をも水をも飲まなかった。初め長崎に来た日から、このメニューはすこしも変らなかった。また、ついに入浴したこともなかったのに、垢づきがれた様子もなかった、という。

いまわたしは、テキストのなかから出来るだけ簡単に事実だけを選び出して書いている。もし同じように具体的に描こうとすれば、全文を引用するほかはないほど、白石の文章は生彩に富み、二人の対話など活々と写し出している。しかもそれは実際の尋問から六年を経た一七二五年のことである。これは如何に白石にとって、シドッチとの対面が印象ぶかいものであったかを語っている。

下巻の冒頭に記されているのであるが、白石にとって忘れがたい場面がもう一つあった。

シドッチに、その姓名・郷国・父母等のことを訊いたときであった。「父は…死して既に十一年、母は…猶今ながらへて世にあらんには、是年六十五歳也。」兄弟は四人であったが、姉と弟は幼にして死し、残るは兄と我のみ、という。白石が重ねて、「男子がその国命をうけて万里の彼方に旅立つからには一身のことを顧みておれないことはいうまでもない。しかし母はすでに年老い、兄もまたいつまでも元氣ではあるまい。『汝の心におゐて、いかにやおもふ』と問うと、シドッチ暫らくは答えることもなく、その顔色は憂わしげに、牀をさすって、『初め、一国の薦拳にあずかり、師の命令をうけたときから、何とかして日本に到達し、その命令を果たそうと思うのほか考えることはなく、老母・老兄もわがこの事業を、道のため、国のため、その幸いこれに過ぎずと悦び合った。しかしこの牀は、どこを

とつても父母・兄弟の軀とそっくり。「いきて此身のあらむほど、いかでかこれをわする、事はあるべき」と答えた。白石はほろりとして、この一節を書いたにちがいない。全巻のなかで最も感動的な場面である。

II

白石が貪るように訊いた外国の地理や社会情勢は中巻に詳しい。一方、シドッチの方は一刻もはやく、その教えを伝えたいと焦っていた。だが、それを聞いたときの白石の反応は興味ぶかい。あれほど博識なシドッチがまるで愚者のようになり、別人の言を聞く思いがした。「こゝに知りぬ、彼方の学のごときは、たゞ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず。」その教法なるものは「荒誕淺陋、弁ずるにもたらず」というのが白石の感想であつた。その最たるものが、「天地のごときも、これを造れるものありといふ事」であつた。

「形而上」という言葉は、明治以降の新造語ではなくて、易经、繫辭に由来することが本書の注釈にみえる。「形而上者、謂之道」「形而下者、謂之器」西洋の学問は「形と器」すなわち物質的・技術的方面だけは優秀であるが、精神的方面は採るにたらず、学ぶに及ばない、という和魂洋才の基本姿勢がすでに白石のなかに現われている。

本書中巻の内容をなすものは、白石が舌を巻いたその形而下学である。しかし、わたしのような現代の一般的な読者の眼からみると、これはもう全く無意味と化した過去の地理学にすぎない。北アメリカの北はグリーンランドに連なり、その「西北の地、いづれの所に至る事を詳にせず」とあり、さらにその「西北の方は、すなはち日本・野作等に当れり」という。

「いまだ詳ならず」とある箇所を拾い出すと、日本の北方・シベリアの地と、「南方一帯の地」すなわち南氷洋である。間宮林蔵の樺太・黒龍江地方の探検（一八〇八—〇九）や、伊能忠敬の実測地図作成（一八〇〇—一七）が、ほぼ百年後のことであり、さらに一八二九年になっても日本地図の持ち出しがシーボルト事件をひきおこすほどであったことを考えると、白石の時代の地図がまだ如何に曖昧模糊としたものであったか、それにひきかえ、人工衛星によって捉えられテレビの画面に写し出される精確な地図が如何に最近のものでしかないか、が分るのである。

つねに新しいものによつて乗り超えられなければならないのが学問の運命である。上巻や下巻と異なり、少しも個人的な言及を混じえず、純粹に客観的な知識の集積に終始した中巻が、当時の知識の程度を知るといふ別の知的要求の対象として以外、もはや何の学問的意味も失つてしまつてゐることは皮肉である。

それにもかかわらず、筆者の注意をひいた点を幾つか列挙したい。一つは、外国の固有名詞の表記に片仮名を用いるという今日まで伝わる慣行の始まりがここに見られることである。エウロバ、アジアなどという片仮名表記と、一々それに対応して括弧を用い（漢に……と訳するは、即此）として書かれた中国の表記とを比較すると、われわれは何と便利なものを発明したことか、と思う。白石がすべての固有名詞を一つ一つ和漢両様で、並記するのはいささか煩わしいが、それは多分、用いた地図が利瑪竇（マテオ・リッチ）の万国坤輿図など中国産の地図であつたことに由来するのであらう。しかし今日のわれわれですら、固有名詞が漢字でないと、すこし落着かないところがある。「むつ市」「いわき市」などの表記には若干の抵抗がある。因みにわたしの大学の卒業證書には「英吉利文学科」と書かれていた。漢詩に優れ、朝鮮通信使とは漢字の筆談で用を弁じた白石のことである。片仮名表記という画期的な方法にふみきりながら、なおいくらかの躊躇を感じたのではないかと思う。「マレーアットランティム」へ漢に翻して、ダイセイヨウ大西洋といふ」の一行は、片仮名による原音表記が万能でないことを予感していたのであらう。現在の表記は落着くべきところ

ろに落着いたという感じがする。

次には、竹取物語や、あるいは伊曾保物語を読むときと同様に、記述の内容は百も承知のことながら、それが書かれている文章の魅力に引き付けられることである。たとえばイギリスの宗教改革は、

此国もとより天主を尊信して、其教を奉ず。近世に至て、其君、正妃を廃して、寵妾をたつ。天主の教、もと他犯を以て大戒とす。此方教化の主、其破戒の故によりて、此国と絶つ。其教を奉ずる諸国も、またこれとたつ。

という具合である。また選挙の制度は、

大凡エウロバ地方の諸国、其君を立るに、……もし嗣いまだ定まらざるは、臣民各其嗣とすべきもの、名をしるして出す。其しるせし所の数、多きものを以て、其君とす。君、其臣に官を命ずるも、亦これに同じ。臣民薦むるもの多き人を、挙用ふ。君敢てみづから一官を命ずる事も、あたはず

とある。また赤道直下のスマトラを描いては、

春秋の二分には、日影を見ず。春分より秋分に至て、日影南にあり。秋分より春分に至て、日影北にあり。氣候極めて熱く、たゞ夏冬には、其熱甚しからず。人皆裸躰にして色黒く、俗また暹羅に似たり。

という。また、こんな記事がある。

此方諸国の方言、同じからず。しかれども其大約三つに出ず。一つにヘイペレイウス、二つにラテン、三つにキ
リイキス、またヘレッキスともいふ。凡ッ大事を記すには、必ず此等の語を用ふ。

ヘイペレイウスは *Hebraeus* ヘブライ語、キリイキスは *Graecus* ギリシア語、ヘレッキスは *Hellas* ギリシア国(?)
であるから、ヨーロッパ精神が、ヘブライ、ラテン、ギリシアの三大要素から成ることを述べているわけで、シドッ
チが伝統的な思想を懐いていることが分る。彼はまたカトリック宣教師にふさわしく、こんなことも教えている、

此方諸国、君長の位号、数等あり。其上等を、ホンテヘキス・マキシムスといふ。これ最第一無上等の義也。
ひとりローマン教化の主一人のみ、此号ありといふ。此方の諸国、天主の教を尊信するが故に、此号を以て、其人
を推シ称ずるとみえたり。

と。ホンテヘキス・マキシムスは *pontifex maximus* で法王をさす。上に掲げた幾つかの用例にみられるように、歴
史・地理・法律・思想・宗教などがこういう言葉で表現されている。これらの言葉を讀むとき、わたしは薫りの強い
葉巻を吸ったような陶醉を感じる。以上が中巻において指摘したい諸点である。

III

下巻になって、いよいよ宗教に関する問答となるのであるが、その冒頭には、すでに引用したシドッチの老いたる母と兄を想う感動的な姿が描かれている。宗教が、地理や歴史のような客観的事柄ではなく、深く個人の内面にかかわる主体的な事柄であることを印象づける。

しかし、それにもかかわらず、すぐに中心的な教義問答に入るのではなく、宣教師の派遣と布教をうけいれた国々の状況など、宗教に関してもなお客観的な事柄が描かれている。面白いのは、プロテスタント教国オランダに対するシドッチの敵意である。家康のキリシタン禁令は、その初め、オランダ人がカトリックは「世を乱り国を奪ふの事也」と誣告したことによる。しかし、わがローマは開国以来凡そ一千三百八十余年、寸土・尺地たりとも、ひとの国を侵し奪ったことはない。かえってオランダこそ、ケープタウンもマラッカもバタビアもオーストラリアもセイロンも奪ったのである。イスパニヤやフランスなどのカトリック教国も一見海外の土地を侵略したように見えるけれど、こちらは、メキシコやフィリピンのように、統治能力がなくて混乱状態にある土地を教化し、その要請をうけて支配しているのである、と弁明する。したがって日本のような高度な文明国は、他国の統治を要請し「其君を万里の外に」求める必要はない。昔の誤解をといて、再びシャムやシナのようにキリシタン禁制の「国禁を開かれん事」を望み請う、という。

ふたりの対談はいよいよ教義に関する論議に移る。白石は「天主の教、我いまだ聞所あらず。其大略を聞かむ」と

問う。シドッチは、

大凡、物自^{みづか}ら成る事あたはず。必これを造るものを待^{まち}得て成る。今試に一堂の制を見るに、其制自^{みづか}ら成る事あらず。必工匠^{かんなぎ}を待^{まち}えて成る。一家の政を見るに、其政自^{みづか}ら治るにあらず。必君長を待^{まち}えて治る。天地万物、これに主宰たるものあらずして、成る事あらず。其主宰名づけて、デウスといふヘデウス、漢に天主と訳す。……

と答えた。これに対する白石の反応は、次のとおりである。

「天地万物自^{みづか}ら成る事なし。必ずこれを造れるものあり」といふ説のごとき、もし其説のごとくならむには、デウス、また何もの、造るによりて、天地いまだあらざる時には生れぬらむ。デウス、もしよく自ら生れたらむには、などか天地もまた自ら成らざらむ。

使徒信条の第一項には、「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」とある。第二項以下は知らず、第一項のうちにある「天地の造り主は神である」ということ、少なくとも天地万物からその造り主の存在を推理することだけは、人間の理性の自然の光によって可能である、というのが自然神学の立場である。異教徒への布教の手掛りをここに求めたカトリックの宣教師シドッチは、まずこれを説いたに相違ない。

しかし白石には、神による「無からの創造」creatio ex nihiloなどは思案の外であった。だから前に掲げたシドッチのことは、白石という媒体を経由して述べられており、決して元のままではあるまい。「一堂の制」という。「制」

は「製」と同じく、「ほどよく裁ち切る。切つてしたてる。つくる」の意味で、「制作」という熟語にみられる。つまりは一軒の家を建てることにすぎない。したがって「工匠」は、「造り主」のメタファーとしてはあまりに弱い。まして、一家の政を司る君長は何も産み出さない。そこで神はせいぜい主宰者としてイメージされる。

現行の公教要理が「天主」ということばを使っているために、われわれはそのなかに正統的なキリスト教的神観を読みこみがちであるが、白石によれば、これは単にデウスの音訳にすぎない。漢音にて天主は「テンチウ」とよみ、「彼れ此れ音声相近きに」よつて採用されたのである。「たとへばエイズス訳して、耶蘇とするがごとし。」ただ「其声音をうつせるのみ」で、漢字には何の意味もない。しかるにマテオ・リッチが書経にあらわれる上帝と同一視して牽強附会の説をなしたために、儒者たちはその説に惑わされてしまった。もしデウスを天主と訳して、これすなわち「天主の主宰、経にいはゆる上帝」なりと強弁するなら、エイズスを耶蘇と訳して、耶蘇に何の意味があるだろうか、という。

「蘇」には「よみがえり」の意味があるものの、「耶」には「よこしま、いつわり、不正、悪気」などの意味があるために、「ヤソ」という不快な音声をもつて如何にキリスト教徒が迫害されたかを思うと、漢字による音訳にはたいへんな危険が伴うことが分る（「基督」には悪い意味がないために、今も「国際基督教大学」などの正式名称に用いられている）。もしデウスが、そのように、家を建てる大工、国や家を治める君主・家長のような主宰者、との類比で捉えられる存在であるならば、デウスもまた何者かによつて造られたものであろう、また、もしそのようなデウスに自然発生能力があるとすれば、天地万物にもそのような能力があつて不思議ではない、と白石が考えたのは当然である。白石からすれば、デウスは、大工や君長と同じく、造られた者、生まれた者であつて、本質的には天地万物と次元の異なる存在ではない。

ここでもうひとつ併せ考えられることは、彼が日本古来の思想を免れることができず、それが彼の思考を根底において方向づけているのではないかということである。古事記は「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神」ということばで始まる。創世記ときわめて近いけれど、神もまた「成れる」ものであった。

ところでこのように、日本の代表的な思想家と日本最古の古典のなかに自然神学の可能性の有無を探っていたとき、時代も背景の思想も全く異なるバートランド・ラッセルが、一九二七年三月六日、Why I am Not a Christian (なぜわたしはキリスト教徒でないか) という講演を行ない、白石と同じ論理で、第一原因としての神を否定していることを知った。十八歳のときのある日、ラッセルは、ジョン・ステュアート・ミルの自伝を読んで、そこに次のような一節を見出した。

わたしの父は、「ぼくをだれがつくったの?」という疑問には答えることができない、それは直ちに、「だれが神をつくったか?」という疑問をさらに提起するからだ、と教えてくれた。

ラッセルは、続けていう。

このきわめて単純な文章が、第一原因という議論の誤りを、当時のわたしに示してくれたのです。今もなお、示していると考えます。もしあらゆるものが原因をもたなければならぬのであれば、神もまた原因をもたねばなりません。(そして) もしなんらかのものが原因なしにありうるとすれば、その何物かは神であっていいのと同じほ

どにこの世界であつてもいいのです。だからさきの議論には、いささかも妥当性はありえませ⁽²⁾ん。

自然神学的アプローチが白石やラッセルによつて拒否されたからといつて落胆するには及ばない。彼らにとっては、この拒否がキリスト教を拒否する理由になっているが、その逆の場合もある。カール・バルトがすなわちそれで、ここでは、信仰が自然神学を拒否するのである。彼の言葉を摘記すれば、

使徒信条の第一項は、異教徒たちの「入口」というようなものではない。……⁽³⁾

へわれわれには、造り主なる神の真理は直接近づきやすいが、ただ第二項の真理には啓示が必要だ⁽⁴⁾ というような次第ではないのである。……

神が世界の造り主であり給うという事実をわれわれが覚るのは、多様性をもつた世界の存在からではない。……造り主としての神についての知識を、この世界がわれわれに与えるということはない。むしろ、人間が太陽や月や星から、或いは自分自身から、真理を覚ろうとする場合には、その結果は、いつも偶像であつた。⁽⁵⁾

だから、われわれが「造り主なる神とその御業が何であるかということ⁽⁶⁾を認識しうる」のは、「三一の神がわれわれ人間のためにイエス・キリストにおいて何をなし給うたか⁽⁷⁾という⁽⁸⁾ことが、われわれの眼に示された場合⁽⁹⁾においてのみ」であつた。「造り主なる神とその御業との認識を、人間に対する神の働きの認識から、区別することはできない」のである。⁽¹⁰⁾

神が認識され、さらに世界の中において再び認識され給うて、被造物の中における神の喜ばしい讃美が生じる場合には、それは、神がイエス・キリストにおいて、われわれによって求められ見出され給うということに基づいてである。神がイエス・キリストにおいて人となり給うたことによって、神が世界の造り主であり給うということも、あらわとなり、信すべきこととなったのである。⁽⁷⁾

その意味で、

創造認識は神認識であり、したがって、最深究極の意味において、信仰認識である。それは、自然神学がそこに場所を見出すような入口では決してない。⁽⁸⁾

われわれには、啓示の第二の源泉というようなものは無いのである。⁽⁹⁾

かくして使徒信条は始めから終りまで、神の啓示によってのみ知らされる信仰に属するのである。バルトが一九三七年春と一九三八年にかけて、自然神学の普及を目的としたギフォード講演において、大胆にも「『自然神学』と宗教改革の教説」という講演を行ない、自然神学は「根本的な誤りに拠っている」がゆえに、「全然別な神学の声を私の力と知恵の及ぶかぎり伝える」ことが自己の使命であると述べたことは興味ぶかい。⁽¹⁰⁾ 自然神学が異教徒を信仰に導く入口として役立たないとすれば、如何なる途が残されているか。それはシドッチが彼の思想に反して自ら実現したことであり、後に触れるであろう。

再び『西洋紀聞』に戻れば、シドッチは、天地の創造につづいて、アダンとエワの創造など聖書に記されたとおりの物語を語る。

凡ッ人物のアニマに三の品あり（アニマは魂なり）。草木のごときは生ナツのみ（榮枯のみあるをいふ）。禽獸のごときは、動動のみ（飛走のみあるをいふ）。此二つの物は、形すでに滅びぬれば、アニマもまた滅びぬ。これを、始あり、終ありとす。人のごときは、最モトモト靈にして、其アニマ天地と共に滅びず（人は靈魂ありて、草木・鳥獸に異也といふ）。これを、始あり、終りなしとす。

この一節は聖書に由来するものではなく、アリストテレスによる植物魂・動物魂・理性魂の区別に言及したものである。カトリック宣教師の哲学的背景を窺わせるものとして注意をひく。

そのほか、ルウチヘルがその知にほこつてデウスを僭称するが、それをにくんだデウスは、彼に与した輩でかもろとも、火坑地獄ともいふべきインベルノへ追い落とす。インベルノで苦しむことを恨んだルウチヘルは、テリアリ（地上の楽園、エデンの園）に飛んで、まずエワにマサン（ポルトガル語で、りんご）を食わせる。アダンもまたエワにすすめられて、これを食らう。楽園からの追放とその子孫たちの苦しみ。ここにおいてアダンとエワ、コンチリサン（懺悔）の心をおこして、ふかくその罪を悔いる。デウスは、その罪が大きくて、ふたりだけでは贖うことができないことを憐れみ、「自ら人の身と生れて、二人に代りて、其罪を贖はむ事」を約束する。この筋書きは、『失樂園』と全く同じ

である。

そのあとは、ノアの洪水、モーセの十戒、エジプトからの脱出、キリストの降誕・磔殺・復活・昇天、弟子たちの活動と殉教、コンスタンティヌス大帝によるキリスト教公認、「サントス・ペートル・エツケレイジャ」の建立、法統の継承、教会の職制、そして宗教改革による異端の発生からアジア諸国の宗教事情まで、すなわち、シドッチの説明は、天地の創造から現在に至るまでの救済史のすべてに及ぶのである。

それに対する白石の反応は、「西人其法を説く所、荒誕淺陋、弁ずるにもたらず」とはいえ、そのあまりにも極端なものは反論しないわけにはいかない、として、天主という翻訳の当否から始めて、造り主としての神に関する議論を展開したことは既に見たとおりである。さらに、「デウス初に天地万物を造らむとするに当りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上にハライソ（天堂）を作」ったというが、「天地もいまだ生ぜずして、斯ノ人すでに善惡の相あひまわかれしも心得ず」という。

また、デウスが、アダムとエバの原罪から三千年の後にイエスとなって生まれ、彼らに代つて罪を贖うというのも、「嬰兒の語」に似る。現在の裁判官なら情状を酌量して即刻赦すだろう。「天戒」とはいえ、もともとデウス自らが設けた戒めである。自らその罪を赦せば、それですむことである。ましてその戒めたるや、果を食うな、というだけのこと、それしきの罪なのに、過つて食べた人自身では贖いえず、三千年間も判決がおりないまま、揚句のはてに、「デウスそれに代りて、其罪をうくる」という。はたしてそれほどの大事だろうか。

ノアの洪水やモーセの紅海渡渉も理解しがたい。デウスが自ら称して「天地・人物を生じ養ひて、大公の父・無上の君」というのであれば、どうして、万人を善人たらしめ、その教えに従わせることができないのか。なぜ、世界中の人が絶滅するような事態に立ち至らせたのか。たとえデウスといえども万人を善人たらしめ教化することはできな

いというかもしれないが、それなら、どうして「天地能造の主」などと称するのか。また、愚かで、立派な教えのあることなど知らない連中の罪など深く咎めるにも値しないのに、全世界の人々をことごとく絶滅させておいて、よくも「大父・大君」などといえたものだ。

モーセの十戒も、仏教の戒めを採用したものである。異なるところはただ仏教の不邪淫を二条に分け、「第六、じゃいんをおかすべからず」と、「第九、他のつまをこひすべからず」とにしたことである。シドッチは、世間には、その生母のゆえにその子にくむ父があり、その生母のゆえに父を怨む子がある、その母を同じくするものは相愛し、母を異にするものは相にくむ、父子・兄弟の不和も一夫多妻より生ずる、という。それに対して、白石は、ヨーロッパ諸国においては世嗣が絶えたことによって生ずる王位継承戦争が多いことをもって、「其流弊のこゝに至れるも、またあはれむべし」と反論する。

白石はまた、キリスト教と仏教とに類似の伝承や行事の多いことをとりあげ、これはユダヤと西印度との距離が近いために、キリスト教が仏教から盗んだものだ、という。こういうふうにして、白石は、シドッチの説く教えをことごとく却けてしまう。

白石の反論のなかで特に興味をひいたものに、次のような議論がある。キリスト教は、天主を大君・大父として仕えよ、というが、「臣は君を以て天とし、子は父を以て天とし、妻は夫を以て天とす」べきではないか。君につかえて忠、父につかえて孝、夫につかえて義なる三綱こそ天につかえる道である。もし君のほかに仕えるべき大君あり、父のほかに大父あって、その尊きこと君父以上であつたならば、家に二尊、国に二君あるというだけでなく、これ以上に、君父をないがしろにすることはないだろう。たとえ、そんなことを教えないにしても、その弊害が極端に流れれば、きっと平気な顔をして君父を弑逆することになるだろう、という。この白石の觀察はなかなか鋭い。

「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらず、反つて剣を投ぜんために来れり。」人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに敵対させるために来た。こうして、自分の家族の者が敵となる。「我よりも父または母を愛する者、……我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相応しからず。……我がために生命を失ふ者は、これを得べし」(マタイ伝一〇・三四—三九)。

ここに真理に徹したキリスト教の教えが逆説的に表現されているけれど、白石がもし聖書のこの一節を読んだら、得たり賢しとばかりに膝をうつたであらう。

シドッチが説く教義は啓示に基づくものであつて、自然理性によつて把握されるものでは本来ない。自然神学が説くところは、人間理性の自然の光によつて、少なくとも神の存在は推理される、ということであつた。しかしそれが事實上、不可能であつたことは既に述べた。むしろ白石は、律気に、誠実に、敏感に、かつ理性的に、キリスト教の教義すべてと対決したのであつた。

それでは一体、何によつて人は神を知るか。本書はそれをも見事に示している。シドッチの身のまわりの世話をしたのは長助・はるといふ老夫婦であつた。二人はかつてその主人であつた黒川寿庵から教えを聞いたが、国の大禁にそむくことができようなどとは思わなかつた。しかし、それから長い年月を経て、このたび、シドッチが、己が信ずる真理のためには一身をかえりみず、万里に旅してここに来たり、捕われおるさまを目のあたりにしながら、余命いくらもない命を惜しんで永久に地獄に堕ちる惨めさを痛感し、彼から洗礼をうけて信徒となつた。これらのことを言わないのは国恩にそむくように思われるので、正直に自首するが、後はいかようにも法に従つて処分して下さい、と申し出たのである。シドッチが真理を証し、二人の信者を獲得したのは、彼の説いた教えによつてではなく、彼の行為・彼の存在そのものによつてであつた。

まず夫婦は分けて別の場所におかれ、シドッチは獄につながれた。こうして真実が明らかになった以上、彼は大声をあげてわめき呼ばわり、「夫婦のもの、名をよびて、其信を固くして、死に至て志を変すまじき由をす、むる事、日夜に絶ず」とある。そしてその年、すなわち一七一四（正徳四）年一〇月二日の夜半に死んだ。享年四七歳。

死因には諸説あり、自発的な死であったか強制された死であったかは遂に分らない。狭い穴のような地下牢に閉じこめられ、窒息死か餓死をしたようである。この礼儀正しく、思いやり厚く、志操堅固な「博聞強記」の人物に対し、この国は酷薄残忍な死を強いたものだ。

しかも、その布教は失敗であった。彼が勝ちえた信者は長助・はるの夫婦だけであった。これはわたしにパウロのアテネ伝道を連想させる。「知らざる神に」と題し、「この世界とそこにある万物とを造った神は天地の主である」ことから説きおこした最も形而上的な説教は惨憺たる結果におわり、勝ちえた信者はきわめて少数であった。そのなかにアレオパゴスの裁判人デオヌシオとダマリスという女があった（使徒行伝一七・二三―三四）。長助・はるといい、ダマリスといい、ここに名を記されるほかは全く無名の人物である。そういう全く無名の人物がここに名を記されることによって永久に残ったのだ。白石とデオヌシオは政府の高官であった。デオヌシオはアテネ最初の監督に任ぜられ、パウロが残した信者たちを守ってアテネの教会を支えたといわれる。それにひきかえ、白石はシドッチの教えを批判する書物を書いた。だが、この書物は、陰画のごとくであり、焼付けさえすれば、鮮明に細密に真の福音がどこにあるかを示す陽画となりうるものであった。

注

- (1) 『新井白石』(岩波書店刊行「日本思想大系35」、一九七五、八三、五六九—七〇頁参照。本文からの引用はすべて本書所収の『西洋紀聞』による。一々頁数をあげることはいらない。
- (2) Bertrand Russell, *Why I am Not a Christian* (London: George Allen and Unwin Ltd. 1957), pp. 3-4.
『ラッセル』(河出書房刊行「世界の大思想26」、昭四一、四四)所収 市井三郎訳「なぜわたしはキリスト教徒でないか」三一九—二〇頁。
- (3) 『カール・バルト著作集10』(新教出版社、一九六八)所収「教義学要綱 第八項 造り主なる神」、五九頁。
- (4) 前掲書、五九頁。
- (5) 前掲書、六一—六二頁。
- (6) 前掲書、六一頁。
- (7) 前掲書、六二頁。
- (8) 前掲書、六一頁。
- (9) 前掲書、六二頁。
- (10) 『カール・バルト著作集9』(新教出版社、一九七二)所収「神認識と神奉仕——スコットランド信条講解 第一講 『自然神学』と宗教改革の教説」、三三頁および三四頁。